

防衛的帰属理論に関する実験的研究

—— 交通事故の当事者に関する責任判断を中心として ——

諸 井 克 英

I. 関連研究の概観

自己を取り巻く環境内で生じるさまざまな出来事の原因を人が求める過程、すなわち原因帰属過程は、その環境が規則的で秩序ある因果の世界であることを確証させ、その中で自己や他者のとる行動結果を予測可能とする一般的意義をもつ。

本研究では、一見したところ原因が不明確である偶然に生じた事故(accident)に関する原因帰属過程に焦点をあて、人が自己の心理学的安寧を維持しようとする自己防衛の動機づけを仮定する防衛的帰属理論について論じ、先行研究で得られた諸知見を検討する。

偶然に生じた事故の責任帰属におよぼす自己防衛的動機づけの影響

(1) 重大さ依存 - 責任帰属 (severity-dependent attribution of responsibility) 仮説の提起

Walster (1966) は、自己防衛的動機づけに基づく帰属上のバイアスに注目し、一見したところでは原因が不明確である偶然の事故に関して、重大さ依存 - 責任帰属仮説を提起した。この仮説によれば、偶然に生じたネガティブな結果をもたらす事故に関して、次のような過程がその事故の知覚者に生じる。その結果が些細なものであるときには当事者に同情し偶然性に原因を帰属するが、その結果が重大であるときにはそのような事故生起から自己を心理的に防衛するために当事者に大きい責任を帰属する。

Walster (1966) は、丘の上に駐車した自分の車が無人のまま坂を下り始めるという事故の当事者である男子高校生の責任について、男女大学生に判断させた。そして、結果が重大であるほど、当事者への責任帰属が強まり、厳しい道義的基準が課される、という肯定的な結果を得た。しかし、次に行った2つの

実験では仮説は支持されなかった (Walster, 1967)。実験 1 では、家を購入した中年女性が、地滑りのために損害を受ける場合と、鉦脈が発見されて利益が生じる場合、それぞれについて、男女高校生に当事者の責任を判断させた。しかし、予測とは逆に、結果が重大であるほど責任帰属が弱くなった。さらに、実験 2 では、政府の計画変更によって損害を被ったり利益を受けたりする、土地購入者の男子大学生の責任について男女大学生に判断させたが、当事者の責任について何の傾向も生じなかった。したがって、Walster 自身は、自ら提起した重大さ依存 - 責任帰属仮説を十分に支持する結果を得ていないといえる。

(2) 関連性 (relevance) 概念の導入

Shaver (1970 - b) は、Walster の一連の実験結果に対し、1) 自らも後で適用される可能性のある厳しい道義的基準を当事者に課すのは自己防衛的傾向と矛盾する、2) 判断者にも生じ得る事故に直面したときに自己防衛的傾向が生じる、と批判を加え、次の 3 つの実験を通し関連性概念を提起した。

彼は、過去よりも将来の状況は関連性に乏しいため年長の当事者には責任が帰属されないと予測し、実験 1 を行った。Walster (1966) と同じストーリーを用い、当事者の年齢 (男性; 高校生, 大学生, および大学院生) を、操作し、男子大学生に当事者の責任判断を求めた。当事者が年長であるほど大きい責任が課され、同年齢の当事者の行動に対しては寛大な判断が下された。

この予測に反する結果から関連性概念を洗練させ、当事者と判断者との環境条件間の類似性を意味する状況的関連性と、何らかの個人的特徴での類似性を意味する個人的関連性とを区別した。そして、1) 状況的関連性が高いときにはのみ自己防衛的動機づけが喚起される、2) 当事者と判断者との間に何らかの個人的関連性があるときには非難回避 (blame avoidance) のために偶然性に対して、そのような関連性がないときには危害回避 (harm avoidance) のためその当事者に対して、それぞれ、帰属がなされる、という仮説を提起した。実験 2 では、当事者と判断者との人格的特徴の類似・非類似を女子大学生被験者に仮定させ、交通事故の当事者である女子大学生の責任判断を求め、この仮説を支持する結果を得た。続いて行った実験 3 では、当事者と判断者の性の一致・不一致によって個人的関連性を操作した。金属研究所勤務の男性が実験室現場を離れた間に爆発が起き見学児童が負傷する事故について男女大学生に判断させたが、責任帰属に関連性の効果は認められなかった。Shaver (1970 - b) による関連性概念の導入は後述するように後続の研究に影響を与えるが、彼自身の一連の実験は必ずしも彼の考えを支持していない。

(3) ポジティブな結果をもたらす事故への拡大

Walster 自身は (Walster, 1967), 重大さ依存 - 責任帰属仮説は結果の正負にかかわらず適用できると考えていたが, Shaw & Skolnick (1971) は, この仮説を事故の結果がネガティブな場合に限定すべきだと主張した。つまり, 自己防衛的動機づけの観点に立てば, 結果がポジティブであるときには, 重大な結果は当事者に帰属するよりも偶然性に帰属したほうが自己にもそのような結果が生じる心理的可能性が高まる。すなわち, 彼らは, 幸運についてのランダムな分配の信念の存在を仮定した。したがって, 事故の結果の重大さと責任帰属との間には, 結果がネガティブな場合には正の関係が, 結果がポジティブな場合には負の関係があると予測される。Shaw & Skolnick (1971) は, 化学の課題実験中にポジティブあるいはネガティブな結果が生じた男子大学生に対する責任判断を, 男女大学生に求めた。そして, ポジティブな結果でのみ彼らの予測を支持する結果を認めたが, 被験者を男性に限定するとネガティブな結果でも予測と一致する結果を得ることができた。

ところで, Shaw & Skolnick (1971) によるポジティブな結果への拡大では, 個人的関連性の効果について触れていない。しかし, 幸運についてのランダムな分配の信念を仮定したのは, 明らかに事故の当事者と自己との間の個人的関連性が低いことを前提としている。原因帰属に関する研究ではないが, Jellison & Mills (1967) は, 女子大学生を被験者として, 好みの点で自分と類似した女子大学生がデパートのクジで外国旅行が当たっていることを知ると魅力が高められることを見出し, 類似他者の幸運が自己の快楽の源泉となり得ると解釈した。したがって, 事故の当事者と自己との間の個人的関連性が高い場合には, 結果が重大であるほど当事者に対する責任帰属が強められると考えられる。

(4) 偶然に生じた事故に関する防衛的帰属仮説の定式化

当該の事故が自己にとって状況的関連性の高いときにのみ, 自己防衛的動機づけが喚起され, 自己の安寧を維持・高揚させるような方向に原因帰属がはたらく。その際, 事故の結果の重大さ, 事故の結果の正負, および事故の当事者と判断者との間の個人的関連性の程度が, 原因帰属の方向と程度とを規定する。

つまり, 事故の結果がネガティブな場合には, 個人的関連性が低いときには結果が重大になるほど責任帰属が強まるが, 個人的関連性が高いときには結果の重大さに伴って責任帰属は抑制される。他方, 事故の結果がポジティブな場合には, 個人的関連性が低いときには結果の重大さとともに責任帰属が抑制されるが, 個人的関連性が高いときには逆に責任帰属は強められる。

結果の重大さ、および関連性の効果

(1)事故の結果の重大さ

Medway & Lowe (1975)は、試験で“やま”をかけた大学生が試験結果によって心理学被験者の必修時間が変更されるというストーリーを、男女大学生に呈示した。その結果がネガティブであるときには結果の重大さと責任帰属との間に正の関係がみられたが、結果がポジティブなときには関係が認められなかった。他方、新垣(1976)は、生物学の課題の標本採取中にポジティブあるいはネガティブな結果がもたらされるというストーリーを男女大学生に呈示し、結果がポジティブなときに結果の重大さと責任帰属との間に負の関係を得た。しかし、ネガティブなときには何の傾向も認められなかった。

Cordray *et al.* (1975)は、12歳から74歳までの男女(平均20.7歳)を被験者として、Kissinger がノーベル平和賞に決定した4日後に、東南アジアでの平和(極端な結果)、ノーベル平和賞の授与(中程度の結果)、ノーベル平和賞へのノミネート(些細な結果)、それぞれに対する彼の責任についての判断をさせた。そして、結果が極端であるほど責任帰属が弱まることを見出した。しかし、Cordray *et al.* (1975)は、この所見をKelley (1973)の提唱する割引原理(discounting principle)に基づいて解釈している。すなわち、結果が極端なときには、複数必要原因シェーマ(multiple necessary causes schema)に基づき、単一の原因すなわちKissinger 自身の責任は割引かれる。結果が些細なものであるときには、複数十分原因シェーマ(multiple sufficient causes schema)に基づきKissinger のみでその結果を引き起こすという判断が導かれる。この割引原理に基づくと、ネガティブな事故ではWalster の仮説と逆の傾向が予測される。このネガティブな事故についての彼らの解釈は曖昧である。

外山(1977)は、登山中の経路の選択でネガティブあるいはポジティブな結果が生じるストーリーを女子短大生に呈示し、その際に友達の意見を操作することによって、この割引原理とともに割増原理(augmentation principle)をも検討した。しかし、これらの原理が結果の責任帰属において作用している証拠を認めることはできなかった。ただし、当事者の行動選択に関する責任帰属については、同様のストーリーを用いた後の研究(外山, 1984)も含め、両原理に対する肯定的結果が得られている。

Lowe & Medway (1976)は、中年セールスマンのミシン販売(低関連)および基礎心理学受講大学生の被験者参加(高関連)に関する2種のストーリーを結果の正負および重大さを操作して、男女大学生に呈示した。結果の正負にか

かわらず、結果が重大になるほど当事者への責任帰属が高まった。ポジティブな結果での責任帰属傾向が Shaw & Skolnick (1971) による自己防衛的動機づけ予測に反することから、彼らは、Jones & Davis (1965) の対応推論理論に基づき全体の結果を解釈した。つまり、当該状況での結果が判断者に高い快樂上の関連性 (hedonic relevance) をもつほど、意図の推測、すなわち当事者への責任帰属が強まる。

Younger *et al.* (1978) は、女子大学生を被験者として、Shaw & Skolnick (1971) の実験の追試を行った。当事者への責任帰属では何の傾向もなかったが、彼らと同様に、ポジティブで重大な結果をもたらす事故の場合に偶然性への帰属が高まった。

Arkkelin *et al.* (1979) は、道路状態、交通状態、運転手の事故歴、車の測度、車のブレーキ状態、被害者にとっての結果の重大さ、運転手にとっての結果の重大さ、それぞれに2水準を設け、事故の結果に対する運転手の責任を大学生に判断させる4つの実験を行った。重回帰分析によれば、運転手の統制下にあると考えられる車の測度とブレーキ状態についての情報が大きな影響をもつが、結果の重大さの情報は責任判断に影響しなかった。ただし、この実験では、情報の組み合わせを変えた40の事故について被験者に連続して判断させているので、事故の重大な結果がはたして被験者にとって心理的脅威となっているのかは疑わしい。さらに各実験の被験者が10名にすぎない点も問題といえよう。

Fincham & Hewstone (1982) は、同輩が関わった事故の記述を、少年 (14 - 16歳) に呈示する実験で、重大さ依存 - 責任帰属仮説と一致した傾向を得た。しかし、彼らは、これを動機づけ上の歪曲よりも規範的見解の反映と解釈した。

石村らの研究グループ (石村ら, 1986) は、ネガティブな事故における当事者の役割関係を操作したストーリーを作成し、サンプル抽出された一般市民 (20歳以上70歳未満、日本3都市、米国1都市) と、刑務所の受刑者 (日本) とに責任判断を求めた。それによると、結果の重大さは一般的責任帰属に影響をもたらさなかったが、刑務所に入れられるのに値するかを問う責任負担では重大さ依存 - 責任帰属仮説と一致する差が生じた。

ところで、Burger (1981) は、ネガティブな事故における加害者の責任に限定して、重大さ依存 - 責任帰属仮説に関する22の先行実験での結果を検討した。事故の結果の重大さと責任帰属との間に有意な正の関係を認めているのは6実験にすぎなかったが、各実験での有意水準をZ変換して (有意でないために有意水準の報告がないときは $p = .50$ とする) 22実験で平均すると、両者の間に

正の関係があると結論できた。さらに、重大さ依存 - 責任帰属仮説を棄却するためには、否定的結果を報告する60実験を必要とする。したがって、自己防衛的動機づけ以外の代替説明が可能であるにせよ、責任帰属の重大さ依存傾向は一般的現象といえよう。

(2)関連性

まず、ネガティブな結果を生じる場合の関連性の効果を検討した研究を概観しよう。

Chaikin & Darley (1973) は、監督者が作業結果を誤ってだいなしにしてしまう実験場面を収録したビデオを、男子大学生に観察させた。後に予定されている実験で作業者になると教示された者は、監督者になると教示された者よりも、その事故の責任を監督者に帰属する傾向があった。さらに、監督者になると教示された者は、結果が重大であるときに監督者への責任帰属を抑制した。

McKillip & Posavac (1975) は、個人的関連性の効果に関して行動上および態度上の類似性を操作し、大学生を被験者として (実験1: 男子; 実験2: 男女)、以下の結果を得た。パーティーからの帰宅途中に自動車事故を起こした当事者の責任について、1) 判断者がマリファナ常習喫煙者であると、事故直前にマリファナを喫煙した当事者への責任帰属は低く (実験1)、2) 当事者との態度上の類似性を知覚している判断者では Walster の重大さ依存 - 責任帰属仮説に一致する傾向が生じ、非類似であると知覚している判断者では逆の傾向が生じた (実験2)。

Shaw & McMartin (1977) の実験では、状況的関連性 (化学実験場面、栄養学実験場面; 前者は男性、後者は女性にとって関連性が高い) と個人的関連性 (当事者である大学生と判断者である大学生との性の一致・不一致) とを同時に操作した。状況的関連性が高い場合、個人的関連性が低いと Walster の仮説に一致した傾向が生じ、個人的関連性が高いと逆の傾向が認められた。しかし、状況的関連性が低いときには個人的関連性の効果が生じなかった。Schiavo (1973) は、先に挙げた Shaw & Skolnick (1971) のストーリーの当事者を女子大学生に代え、女子大学生に判断を求めた。しかし、責任帰属について結果の重大さの効果を認めることはできなかった。これは、女子大学生にとって、化学実験場面の状況的関連性が低かったためと解釈される。

Fulero & Delara (1976) は、男女大学生に強姦の被害者女性の責任判断をさせた。被害者の年齢 (20歳の大学生, 50歳の主婦) を操作した実験1、被害者の年齢と社会的望ましさ (20歳の大学生, アルコール中毒の45歳の女性) とを

同時に操作した実験2ともに、女子の被験者でのみ自己と被害者に年齢の類似性があるときには被害者への責任帰属が抑制されることを見出した。強姦ストーリーを用いた Thornton (1984) も2つの実験で態度上の類似性の知覚が同様な仕方では責任判断に影響することを女子大学生を被験者として示した。

Wang & McKillip (1978) は、凍結道路における自動車同士の衝突事故で、1) 中国人が加害者、米国人が被害者、2) 米国人が加害者、中国人が被害者、3) 当事者の人種情報なし、の3つのストーリーのいずれかを、米国留学中の中国人大学生、米国人大学生、および一般米国人(平均35.8歳)のサンプルに呈示した。その結果、当事者の人種が不明確なときにはサンプル差が生じなかったが、当事者の人種が明確であるときには、中国人大学生は米国人当事者に、一般米国人は中国人当事者に対する責任帰属が高かった。米国人大学生の場合は責任帰属に差がなかったが、それは、彼らの人種意識が他の2サンプルに比べて低いため(同時に測定した人種意識尺度による)だと解された。同一集団に属する当事者への責任判断の寛大化傾向をもたらすこのような社会的範疇化の効果は個人的関連性の効果として理解できる。先述の Fincham & Hewstone (1982) は、個人的関連性(絵画に対する好み的一致)とともに、事故の当事者が判断者と架空の同一集団に所属していると仮定させ社会的範疇化の効果も検討した。しかし、両者ともに責任帰属への効果をもたらさなかった。

萩原ら(1977)、および Hagiwara (1983) は、自動車事故の当事者の責任を男女大学生に判断させ、運転免許を取得している被験者が事故を起こした運転手により厳しい責任判断を示すことを見出した。これは防衛的帰属仮説とは逆の傾向である。

石村らの研究グループ(石村ら、1986) は、大学生および地方公務員を被験者(日本人)として、先述の研究での事故ストーリーの一部を用い、第三者、加害者、被害者のいずれかの立場から責任判断をさせ、加害者、被害者の立場いずれでも、Shaver らの個人的関連性に基づく仮説と逆の傾向を得た。彼らは、被験者に反省的、悔悟の態度が生じたためだと解釈した。

次にポジティブな結果を生じた事故での関連性の効果を検討した研究について述べよう。

McKillip & Posavac (1975, 実験2) は、パーティーで偶然に出会った父親の幼なじみが自分に職を世話してくれるというストーリーを大学生に呈示したが、態度上の類似性の効果は見出せなかった。

先述した Cordray *et al.* (1975) の研究では、保守的態度をもつ被験者が東南

アジアの平和の原因を Kissinger に帰属させ、革新的態度をもつ被験者がその原因を反戦運動に帰属した。

ポジティブな結果についての関連性の効果を検討した実験は少ないので仮説の妥当性については曖昧なままであるが、ネガティブな結果については仮説通りの関連性の効果をおおむね認めることができよう。ただし、萩原ら(1977)、および Hagiwara (1983) の研究で防衛的帰属仮説と逆の関連性の効果が得られた。このことについては、1) 免許所持者の高い交通安全意識の反映である、2) 免許所持者が運転行動に関してもつ他者と異なる情報の影響である、3) 免許所持者が他者を優良運転手と不良運転手とに分け、自らは前者、ストーリーに登場する運転手は後者であると考えている、などのさまざまな解釈が可能であろう。また、石村らの研究グループ(石村ら、1986)の結果も含めると、日本人特有の謙虚さの表れとも考えられる。

(3) 認知的脅威

先述の Thornton (1984) は、認知的脅威の喚起が自己防衛的動機づけが作用する前提条件であるならば、強姦ストーリーによって生じた喚起が、1) 他の原因へ錯誤帰属されると自己防衛的動機づけが抑制され(実験1)、2) 他の手段によってその喚起が高められると自己防衛的動機づけがより強く作用する(実験2)、と考えた。同時に操作した個人的関連性との交互作用は生じなかったが、責任帰属を増減させる主効果は認められた。

また、Thornton *et al.* (1986) は、女子大学生に強姦ストーリーを読ませている間に皮膚電気反応を測定し、当事者に対する責任帰属との関連を検討した。実験1では、皮膚電気反応は、当事者に対する人格上および行動上の責任帰属とのいずれの間にも有意な正の相関があった。さらに、実験2では、Thornton (1984) と同様に、強姦ストーリーによって生じた喚起を他の原因に錯誤帰属させる条件を加えた。この条件では、皮膚電気反応と責任帰属との間には有意な関係が生じず、当事者に対する責任帰属自体が低減した。しかし、実験1と同じ条件では実験1と同様の結果が得られた。

Dollinger (1986) は、サッカーの試合中に落雷のために意識喪失した3人の子どものうち1人が死亡した事故について、その試合に関わっていた子どもの事故に関する原因帰属と情動的動揺を調べた。その方向を問わず原因帰属をした子どもは、原因帰属をしなかった子どもに比べ、情動的動揺を示す割合が大きかった。これは、現場研究であるために因果的方向に問題があるにせよ、Thornton らの一連の実験での知見に対応しているといえる。

若林ら (1987) は、1986年に起きたチェルノブイリ原子力発電所の事故について、男女大学生に原因帰属をさせた。原子力発電自体の本質性に帰属した者が半数近くを占め (49.6%)、偶然性に帰属した者は少数であった (14.5%)。さらに、日本における同様の事故の生起可能性を、前者は高く、後者は低く、見積もっていた。これは、認知的脅威が偶然性への帰属を抑制するように方向づけることを示唆している。

先行研究におけるその他の知見

(1)事故の構造

①事故原因の曖昧さ： Phares & Wilson (1972) は、当事者と結果との関係が非常に直接的であり当事者に明らかに過失のある状況（構造的状況）と、それらの関係が曖昧である状況とを区別した。そして、男性当事者が関与した交通事故ストーリーを男子大学生に呈示し、重大さ依存 - 責任帰属仮説は前者の状況にのみ適用されるという結果を得た。Stokols & Schopler (1973) も女子大学生を被験者として、強姦の被害者女性の行動上の責任が明確である場合により責任が帰属されることを見出した。

しかし、Walster (1966) は、当事者の責任に関する客観的証拠が曖昧であるときに自己防衛的バイアスが強まると仮定している。したがって、これらの知見は防衛的帰属仮説に反するといえよう。

②事故の当事者の立場

Ugwuegbu & Hendrick (1974) は、銀行強盗の命令に銀行員が逆らったために強盗が発砲して、客の1人にその弾丸が当たるというストーリーを、男女大学生に呈示した。その際、3人の当事者の性と客のケガの程度を操作した。結果が重大になるほど強盗と銀行員への帰属が強まる傾向が得られたが、この傾向は、両者が異性同士であるときの銀行員への責任帰属で顕著であった。Gleason & Harris (1976) も、男性加害者、歩行者、および犬の3者が登場し、歩行者か犬のいずれかが被害者となるストーリーを、被害の重大さと加害者の行動の自由（操作内容は不明）とを操作し、女子大学生に呈示した。加害者に対する責任帰属は結果が重大である場合に強められたが、歩行者や犬の責任帰属ではその傾向は認められなかった。また、先述の石村らの研究グループ（石村ら、1986）は、加害者の側に間接的な関与者が存在するときに加害者への責任帰属が低減することを見出した。

Shaw & McMartin (1975) は、1)運転手、歩行者ともに被害なし、2)運転手のみに被害あり、3)歩行者のみに被害あり、4)両者ともに被害あり、とい

う4つの交通事故パターンを用い、男女大学生に運転手の責任判断をさせた。責任帰属の点では男子が厳しい判断をする性差のみが見出された。しかし、刑期については、男子は運転手自身に被害があるときに軽い刑を勧告し、女子は歩行者が被害を受けているかのみに基づき刑を勧告する、という結果が見出され、前者は衡平理論によって、後者は道義的顕在性によって解釈された。国吉(1979)は、男女大学生を被験者として、Shaw & McMartin (1975)の追試を行い、責任帰属に関して男女ともに道義的顕在性による予測と一致する結果を得た。

いずれにせよ、事故ストーリーでの当事者の立場の明確化は、防衛的帰属が加害者、被害者いずれに対しても生ずるのかという点で重要である。

③事故の生起頻度：Brewer (1977)は、責任帰属(AR)が、当事者の行動が存在する場合にその結果の生起を期待する主観的確率である一致性(C: congruence)と、当事者の仲介行動がないときのその結果の生起に関する先行期待(PE)によって規定されたと考えた($AR = C - PE$)。Walsterの仮説について、重大な結果は先行期待が低く、特定の行動によってそのような結果が生じたと推論されると、自己防衛的動機づけを仮定しない情報処理モデルの立場から再解釈した。また、個人的関連性についても一致性の差に帰した。この考えはKelley (1973)の共変原理(covariance principle)と一致する。この原理によれば、当該状況で他の人々にも同様の事故が生じていると合意性の基準が満たされて、事故の原因が当事者に帰属されにくくなる。

Schroeder & Linder (1976)は、当該状況での事故の生起頻度が低いと当事者が因果的帰属対象として認知され、事故の結果が重大であると帰属が抑制されと考え、Shaver (1970 - b)の実験3と同じ事故ストーリーを男女大学生に呈示して、これを支持する結果を得た。Tyler & Devinitz (1981)は、大学寮での盗難のストーリーを用い、事故の結果の重大さと事故の生起可能性を独立に操作した。そして、盗難の被害者に対する責任帰属が寮での盗難事故の生起頻度が低いときに強まる傾向を見出した(性に関する記述なし)。先述のPliner & Cappell (1977)の研究でも、道路がスリッパし易かったという情報を判断者に与えると、当事者への責任帰属が低減した。

先述したHagiwara (1983)は、自動車事故の加害者である運転手と、ふつうの人々が同じように行動するか(サンプルに基づく合意性推定)、自分であれば同じように行動するか(自己に基づく合意性推定)を推定させ、当事者に対する責任帰属との間にKelleyの共変原理を支持する相関を得た。さらに、

彼は、自己に基づく合意性推定が虚偽の合意性バイアス (false consensus bias) により、他者に基づく合意性推定に拡大され、両方が当事者に対する責任帰属に影響を与えるが、前者のほうが影響力が強いと考え、それを支持する結果を得た。

一方、Brewer (1977) の考えを支持しない結果も得られている。

Seligman *et al.* (1974), McMartin & Shaw (1977, 予備研究) は、生起可能性を操作したが、責任帰属に対する何の効果も得られなかった。また、Walster の仮説と一致する責任帰属傾向が得られた Medway & Lowe (1975) の研究では、事故の生起可能性の評定で何の差も生じなかった。

ポジティブで重大な結果が偶然性に強く帰属されることを見出した Younger *et al.* (1978) の研究では、同時に生起可能性も低く推定された。彼らはこれらの結果を Brewer の考えに一致していると解釈したが、彼の考えに従えばむしろ結果は偶然性に帰属されないはずであり、矛盾する結果であるといえる。

ところで、Thornton (1984) は、2つの実験で、判断者と非類似な態度をもつ被害者への人格的帰属の高まりに対応して、当該の状況での当の被害者が被害にあう可能性が高く推定される結果を得、Brewer の考えに反すると解釈した。しかし、彼の測度は、一般的生起可能性よりも、当事者がそのような目にあうことを正当化する傾向を反映しているといえよう。

(2) 結果の予見可能性

Walster (1967) は、実際に起きた結果を知った後でその結果の生起可能性を過大に推定する傾向すなわち後知恵 (second guessing) 効果が結果の重大さに比例して強まることを先述の2つの実験によって実証した。彼女は、その理由として、1) 重大な結果ほどそれについて思いめぐらし、結果と先行条件との適合性に関心を持つようになる、2) 重大な結果であるほど予測可能であると思ひ込むことによって心理的安定性を得ることができる、ということを挙げている。もっとも、彼女の実験では、対応する責任帰属傾向が生じなかった。しかし、Janoff-Bulman *et al.* (1985) は、男女大学生を被験者とする3つの実験によって、生起可能性の知覚自体が後知恵効果によって歪みを生じ、そのため強姦の被害者への行動的責任の帰属が強まることを示した。

当該状況での事故生起が当事者に予見可能であれば、当事者への責任帰属が強まる。Whitehead & Smith (1976) は、男女大学生を被験者として、家を購入したが地震によって被害にあった男性当事者への責任帰属は、当事者が予め相談した専門家によって推定された地震生起の可能性が高いほど大きくなるこ

とを見出した。先述の Schroeder & Linder (1976) も当該状況での過去に生じた事故について当事者が熟知しているときには責任帰属が強まることを認めた。萩原ら (1977, ケース 1) は、大学生を被験者として、事故が予測可能である場合には当事者である運転手に責任が強く帰属されることを見出した。また、後述する Sosis (1974) の研究では、内的統制型被験者が当事者に対する責任帰属とともに予見可能性を高く評定した。

しかし、国吉 (1979) は、運転手が事故現場の道路事情を熟知しているかを操作したが、責任帰属上の効果は認められなかった。さらに、Shaver (1970 - b) の実験 3 では、結果が重大であるほど予見可能であったと見做されたが、責任帰属で対応する傾向がなかった。逆に、Medway & Lowe (1975) の研究では、責任帰属の重大さ依存傾向があったにもかかわらず、予見可能性において差は認められなかった。

ところで、結果の予測可能性と責任帰属との関係は、一見したところ、先述の Brewer (1977) や Kelley (1973) の考えと逆になる。しかし、彼らの生起可能性が判断者自身の推定を指しているのに対して、Walster の場合のそれが判断者によって当事者に帰属された当事者自身の推定であることを考慮すれば、一応両者を区別して考えることもできる。

(3) 責任判断次元

Heider (1958) は、責任の水準に関して、1) 行為者に属しているようにみえるすべての結果に対する責任、2) 行為者が生じさせたものすべてに対する責任、3) 行為者が予見可能な結果すべてに対する責任、4) 行為者が意図した結果だけに対する責任、5) 環境の強制による行為の結果に対する責任、という 5 段階を指摘した。この考えに基づき、Fishbein & Ajzen (1973) は、責任帰属が、1) 判断者がとる反応水準、2) 状況についての情報が示す文脈上の水準という 2 要因の関数であると主張し、偶然の事故に関する責任研究がこの点で曖昧であると批判した。同時に、Vidmar & Crinklaw (1974) も、先行研究で用いられている責任概念の曖昧さを指摘している。

ところで、Piaget (1930) は、物質的結果に基づき判断される客観的責任 (Heider の最初の 2 水準に対応) と、当事者の動機に基づき判断される主観的責任 (残りの 3 水準に対応) とを区別し、子どもの責任判断が前者から後者へと発達の移行することを示した。また、責任概念に社会 - 歴史的考察を加えた作田 (1972) は、責任制度が社会の進化とともに客観的責任から主観的責任の水準に移行するとする。したがって、Walster の重大さ依存 - 責任帰属仮説が

もともと非意図的結果に対して提起されていることを考慮すると、防衛的帰属は自己防衛的動機づけによる責任判断水準の“退行”現象として理解できよう。

以上の責任水準に関する論議とは別に、責任という語が、因果的関係、法的責任、および道義的責任の3つの意味を持ち得ると指摘した Shaver (1975) を初め、先行研究で責任概念のさまざまな側面が区別されている。

Harvey & Rule (1978) は、男女大学生に、男性当事者が知人とののしりあう攻撃ストーリーと、自動車運転中に自転車と接触する事故ストーリーとを呈示し、前者では13個、後者では15個の両極尺度で評定を求めた。両ストーリーともに、道義的評価因子、および一般的因子が得られ、攻撃ストーリーでのみ因果的責任因子が現れた。これらは、道義的評価と責任判断が必ずしも同義的ではなく、前者が非難や賞賛についての当事者の価値相応性 (deservingness) を指し、後者が当事者の行動と結果との関係の知覚を指す、という彼らの主張を支持している。

Nogami & Streufert (1983) は、降雪予報にもかかわらず家の前の道路に適切な処置をしなかったため歩行中の婦人がケガをした男性当事者に対する責任を大学生に判断させた。その際、被験者を、後続事象に対する直接的かつ必要な先行条件となる程度を判断するように求められる因果性帰属群と、状況での潜在的結果を予見できる場合の後続事象に対する意図的行動の程度を判断するように求められる責任帰属群とに分割した。前者の群では Walster の重大さ依存 - 責任帰属仮説と一致する傾向が得られたが、後者の群では仮説と逆の傾向があった。責任帰属群の傾向は、当事者の意図を推測させることが被験者に何らかの個人的関連性の知覚をもたらしと考えることができる。

所・細井 (1986) は、責任の側面として、1) 単なる因果性の帰属、2) 責任を帰属された人が負担すべき不利益やその不利益を受忍すべき義務を意味する責任負担、および3) 刑罰や損害賠償を指す問責行動、を区別し、“責任帰属⇨責任負担⇨問責行動”という判断連鎖を提起した。

富田 (1986)、および萩原 (1986) は、日本語における責任という語の日常的意味を検討した。富田 (1986) は、新聞紙面における責任という語の206の用例を採取して、分類を試みた。それによると、責任という語は、1) 果たすべき義務、任務、役割、および分担、2) ネガティブな結果を特定対象の義務違反とする責任帰属、および3) そのような義務違反に相応する何らかの負担義務、という3つの意味で用いられている。一方、萩原 (1986) は、さまざまな20の文脈での責任という語の類似性を大学生に判断させた。多次元尺度解析

の結果、責任の意味が、1)被害発生に対する非難や制裁、2)地位、役割、および立場などに伴う任務や義務、3)そのような任務や義務に関連する規範的評価、という3つに大別された。異なる方法を用いた2研究での分類結果は、ほぼ対応しており、責任という語が3つの意味で日常的に使用されることを示唆している。

また、萩原(1986)は、被害発生に関する責任に焦点をあて、36の事例における当事者の責任を男女大学生に判断させた。多変量解析(クラスター分析、因子分析、および林の数量化Ⅲ類)により、1)当事者の行動と結果との因果関係の直接-間接性に関する客観的責任判断次元、2)当事者の行動における悪意の有無に関する主観的責任判断次元とが認められた。これは、先述の Piaget (1930)による責任判断の発達の区別が、責任判断の際の準拠軸として成人にも内在することを示唆している。

以上に述べた研究に共通に認められている責任の側面として、Harvey & Rule (1978)が主張するように、1)当事者の行動と結果との関係の知覚、および2)当事者の行動に対する道義的評価を挙げることができよう。

ところで、Janoff - Bulman (1979)は、ネガティブな結果に対する自己帰属として行動的自己責任と人格的自己責任とを区別している。行動的自己責任とは、自己に生じたネガティブな結果が再び起こらないように、統制可能な自己の行動にその原因を帰属することである。人格的自己責任とは、自己のもつ個人的価値相応性に関連しており、ネガティブな結果を統制不可能な自己の人格に帰属することである。この区別は、Thornton (1984)、Howard (1984)、および Janoff - Bulman *et al.* (1985)によって他者帰属に拡大された。とくに、Thornton (1984)はこの責任の区別を個人的関連性と対応させた。強姦の被害者と類似した態度をもつと知覚した被験者には非難回避動機が作用し被害者への行動上の責任帰属を行い、被害者と非類似な態度をもつ被験者には危害回避動機が作用し人格上の責任帰属が生じると予測し、2つの実験でこれを支持する結果を得た。

ところで、Janoff - Bulman (1979)による2種の自己責任の区別は、先述の Harvey & Rule (1978)による道義的評価と責任判断との区別に対応しているが、Lerner (Lerner & Miller, 1978)によって提起された正当世界仮説での人格的価値と行為との区別にも対応している。この区別は、筆者(諸井, 1983)が指摘したように、Walster に始まる防衛的帰属理論と Lerner の正当世界仮説との比較・統合という点で重要であるといえよう。

(4)当事者の特徴

①魅力：Heider (1958) のバランス理論に従えば、責任判断者 (P)、事故の当事者 (O)、および事故の結果 (X) の相互の関係はバランス状態に方向づけられる。

Seligman *et al.* (1974) は、航空会社に勤務する女性の昇進に関するストーリーを男女高校生に呈示することによって、ポジティブな結果では (P-X: +) 身体的魅力度の高い当事者に (P-O: +)、ネガティブな結果では (P-X: -) 低い当事者に (P-O: -)、それぞれ責任が帰属されることを (O-X: +)、見出した。先述した新垣 (1976) の研究では、周囲の人々によって高く評価されている当事者にポジティブな結果が、低く評価されている当事者にネガティブな結果が、それぞれ生じたときに当事者への責任帰属が高まった。萩原ら (1977, ケースⅢ) の研究でも、自動車事故の被害者の魅力が高いとき被害者への責任帰属が抑制された。

この当事者の魅力と責任帰属との関係は、好意が類似性の知覚を引き起こすと仮定すれば、個人的関連性の効果としても解釈可能であろう。

②事前の注意：Shaver (1970 - a) は、Walster (1966) のストーリーに自動車の持ち主である男子高校生の保険加入の有無に関する情報を加え、2つの実験で男女大学生に呈示した。その結果、当事者自身が保険に加入しているときに、すなわち事前の注意をしていると見做されたときに、責任帰属が低減された。

Pallak & Davies (1982) は、女性が仕事からの帰宅途中に男性に強姦されるストーリーを、被害者女性の事前の注意の有無と加害者男性の計画性とを操作して、女子大学生に呈示した。被害者が事前の注意を怠り、加害者の発作的犯行であるときに、被害者に対する責任帰属が最も高まった。この結果は偶然性がより高いと思われるときに被害者の怠慢に対する非難が生じることを示している。

③先行経験：Pliner & Cappel (1977) は、男女大学生を対象とし、自動車事故を起こす前にアルコールを飲んでいて男性当事者がコーヒーを飲んでいて場合よりも大きな責任を帰属されることを女子被験者でのみ見出した。この傾向は道路状態についての情報が無い場合に強まった。先述した国吉 (1979) は、事故を起こした運転手の事故経験の有無を操作し、事故経験のある運転手に対する責任帰属傾向が高まることを見出した。

④努力、能力、および意図性：McMartin & Shaw (1977) は、男子学生が化

学実験の課題でポジティブな結果を得るというストーリーを男女大学生に呈示した。実験1では、当事者の能力（化学の成績）に関する情報を結果の重大さと独立に操作したが、能力に関する効果を見出せなかった。さらに、実験2では、能力の代わりに、当事者の努力（化学実験への取り組みの熱心さ）および意図（化学者になる意志）に関する情報を操作した。そして、結果が重大になるほど当事者への責任が抑制される傾向を認め、さらに、この傾向が当事者が努力をしている場合に少し弱められるという結果も得た。後者について、彼らは衡平理論に基づき当事者のインプットとアウトカムとの間に衡平な関係が存在するときに責任帰属が最大になると解釈した。

(5) 個人的傾性

Rotter (1966) は、自己の行動と強化との随伴性に関して、強化が自己の行動の統制下にあると信じる内部統制型の者と、自己の統制下ないと信じる外部統制型の者とが存在すると考え、この信念の個人差を測定する統制の所在尺度を開発した。この信念は、事故の当事者に対する責任帰属にも影響すると考えられる。

先述の Phares & Wilson (1972) の研究では、外部統制型被験者に比べ内部統制型被験者のほうが当事者に大きい責任を帰属する傾向が見出されたが、それは、曖昧な状況下で重大な結果が生じたとき、および構造化された状況下で些細な結果が生じたときであった。男女高校生を被験者とした Sosis (1974) は、内部統制型被験者のほうが横断者をはねた男性当事者（64歳）の責任をより強く帰属する結果を得た。また、Hyland & Cooper (1976) は、ポジティブな結果に関しても同様な傾向を大学生に認めた。偶然に化学上の発見をした化学者に対する帰属は内部統制型被験者のほうが顕著であった。

一方、これらの知見に反すると考えられる結果を得ている研究もある。Sadow & Laird (1981) は、大学生に Walster (1966) と同様のストーリーを呈示した。その際、さまざまな場面での特定の原因への帰属を測定する McArthur (1972) の原因帰属所在尺度を用い、状況帰属型被験者でのみ結果が重大であるときに責任帰属が大きくなる傾向を見出した。彼らは、この傾向を、行為自体の性質よりも事故の結果により敏感であるためであると解釈した。ただし、1) McArthur の尺度は、個人的傾性の測定というよりも Kelley の共変原理の妥当性を検討するために用いられている、2) Sadow & Laird (1981) が報告しているこの尺度の信頼性が低い ($\alpha = .58$)、という点で疑問が残る。また、先述の Lowe & Medway (1976) は、自ら開発した原因帰属尺度を用い、被験者を人物帰属型

と環境帰属型とに選別した。両型被験者ともに関連性の高いストーリーで結果が重大であるときに責任帰属が大きくなる傾向が認められたが、環境帰属型被験者のほうでこの傾向が顕著であった。さらに、Sadow & Laird (1981) および Lowe & Medway (1976) の研究では、両型の被験者間で帰属の程度に差がなかった。Shaw & Skolnick (1971) のストーリーを用いた先述の Schiavo (1973) も、同様に内部統制型被験者と外部統制型被験者との間の責任帰属上の差を認めていない。したがって、統制に関する信念と責任帰属との関係は曖昧なままであるといえよう。

Howard (1984) は、判断者のもつ性役割観が責任帰属におよぼす影響を検討した。彼女は、2つの実験で、男性あるいは女性が仕事帰りに（自動車に便乗する、ジョギングする）暴行される（強姦、強盗）ストーリーを、男女大学生に呈示した。結果は、全体的に責任帰属が男性被害者よりも女性被害者に対して強く、また、女性被害者には人格的責任が、男性被害者には行動的責任が、それぞれあると判断された。これらの傾向は、伝統的性役割観をもつ被験者でとくに認められ、平等的性役割観をもつ被験者では行動的責任についてのみ同様の傾向があった。

山下 (1984) は、職業運転手に、自動車事故ストーリーを呈示し、運転手の立場に立って自己と相手とのそれぞれの過失度を判断させた。そして、職場での管理者による評価の良い運転手が事故の責任を自己に帰属する傾向が強いことが見出された。さらに、優良運転手は、態度として自己帰属傾向をもっていた。後続の研究では (山下, 1986), 職業運転手に危険度と法規抵触の有無を操作した交通行動記述を評価させ、実際の事故率が低く、管理者による評価も良い優良運転手は不安全な交通行動にネガティブな評価をし、自他ともにそのような運転行動はしないとした。また、長山 (1979) は、交通違反者に、1) 悪意のない違反は許容すべきである、2) 検挙は運によっている、という交通違反に対する共通した態度を認めている。これらの研究は、自らが安全運轉行動を実践している場合には、偶然に生じた交通事故の当事者に厳しい判断をすることを示唆している。

先述の石村らの研究グループ (石村ら, 1986) は、責任帰属に対する、刑務所観、保守的政治意識、および内・外罰的性向の影響を検討したが、明確な影響を認めることができなかった。

以上に述べた個人的傾性変数の他に、Shaver (1975) は、道徳的発達の水準や、独断性傾向を挙げている。

Ⅱ．実験報告

本実験の目的

本実験では、50ccバイク運転手が当事者となる事故を素材として用い、事故の結果の重大さおよび個人的関連性の効果に関する防衛的帰属仮説の検討を試みる。

Burger (1981) は、先行研究を検討し、防衛的帰属に関する実験にとって被験者の関与喚起が重要であると示唆した。したがって、1)最近、50ccバイクの保有台数が顕著な増加を示し、交通事故死者数において50ccバイクの運転手の増加が著しい(安藤, 1985; 越智, 1986), 2)被験者の所属大学において交通事故の多発が問題になっている(SUキャンパス, 1986), という事情を考えると、50ccバイク運転手を当事者とする事故ストーリーは、大学生を対象とする本実験で、被験者に十分な関与を喚起すると考えられる。さらに、防衛的帰属に必要な条件とされている状況的関連性も十分に高いと考えられる。

本実験で検討する仮説は以下の通りである。

Walster (1966) に従えば、

仮説Ⅰ： 事故の結果が重大であるほど、事故の当事者に帰属される責任は大きくなる。

Shaver (1970 - b), Shaw & McMartin (1977) に従えば、

仮説Ⅱ - a： 当事者と被験者との間の個人的関連性が低いときには、事故の結果が重大であるほど事故の当事者に帰属される責任は大きくなる。

仮説Ⅱ - b： 当事者と被験者との間の個人的関連性が高いときには、事故の結果が重大であるほど事故の当事者に帰属される責任は小さくなる。

ところで、防衛的帰属理論においては、事故の加害者と被害者とで責任帰属について異なる予測が立てられてはいない。本実験では、50ccバイク運転手が加害者となる事故と被害者となる事故の2通りを設定し、先行研究では曖昧にされている加害者および被害者のそれぞれに対する責任帰属の傾向を検討する。ただし、予め、このことについての仮説を設けることはしない。

また、被験者自身と当事者の性については、本実験では、事故の当事者は、すべて被験者と同性にした。従来の研究ではこの点が曖昧にされる傾向がある

が、Shaver (1970 - b) が性を個人的関連性の操作に用いていることから、この要因の統制は重要だと考えられるからである。

以上の他に、本実験では、1) 事故状況に関する諸評定の因子分析によって、事故判断における次元を抽出する、2) Hagiwara (1983) によって見出された責任帰属と合意性推定との関係について再検討する、ことも目的とする。

方 法

被験者および調査の実施

静岡大学教養部で心理学を受講している男子73名、女子80名を対象とした。調査は、“交通事故に関する印象”調査の名目で、1986年7月上旬に実施した。

刺激材料

別冊ジェリスト (我妻, 1968; 加藤ら, 1975) を参考にして、事故責任が曖昧であるように留意し、バイクの運転手が加害者、歩行者が被害者となる事故、自動車の運転手が加害者、バイクの運転手が被害者となる事故を、それぞれ4種類作成した (立場要因: バイク加害者条件, バイク被害者条件)。予備調査を経て、それぞれ2種類採用した。4つの事故ケースそれぞれについて被害の程度を2段階準備した (重大さ要因: severe 条件, mild 条件)。Table 1, 2 に各事故ケースの概略, および被害者の負傷の程度を示す。なお、事故の当事者は被験者と同性にした。組み合わせに偏りが起こらないように留意して、バイク加害者条件の2つの事故ケースのいずれか一方が severe 条件, 他方が mild 条件になるようにし、バイク被害者条件でも同様にした。

手続き

立場要因と重大さ要因とが組み合わせられた4つの事故ケース, およびそれぞれの事故についての評定が含まれる小冊子を被験者に配布した。これら4つの事故ケースは過去に静岡市内で実際に起きた事故であると最初に教示した。なお、事故ケースの呈示順序はランダムにした。

従属測度

各ケースごとに次の①, ②の順にすべて7点尺度で評定を求めた。

①事故に関する評定

呈示された事故に関して、事故の生起可能性、被害者になる可能性, および加害者になる可能性について推定させた (すべて, “かなり高い(7)” ~ “かなり低い(1)”)。また、事故の重大さについても判断させた (“かなり重大な(7)” ~

Table 1
本実験で用いた事故ケースの概略

	加害者	被害者	事故の内容
【バイク加害者条件】			
A	50ccバイク運転手 20歳の大学生	歩行者 37歳の会社員	雨の中を走行中、対抗車のライトに 目がくらみ、歩行者をはねる。
B	50ccバイク運転手 19歳の大学生	歩行者 47歳の会社員	見通しの悪い交差点での左折時に、 飲食店から出て来た歩行者に衝突する。
.....			
【バイク被害者条件】			
C	ワゴン車の運転手 42歳の店員	50ccバイク運転手 19歳の大学生	停車中のワゴン車の横を走行中に、 ワゴン車のドアが開き、バイクに接触 する。
D	自動車の運転手 44歳の会社員	50ccバイク運転手 21歳の大学生	バイクで雨の中を走行中に転倒し、 後方から来た自動車に接触する。

Table 2
各事故ケースにおける被害者の負傷の程度

	mild 条件	severe 条件
【バイク加害者条件】		
A	お尻にあざができるが、3日で痛 みがとれ、1週間であざも消えた。	肩の関節を骨折し、2ヶ月入院し、さらに 半年間通院した。
B	右腕にあざができたが、4日で痛 みがとれ、2週間であざも消えた。	股関節を骨折し、2ヶ月入院し、さらに1 ヶ月入院した。
.....		
【バイク被害者条件】		
C	右ひじにすり傷ができたが、1週 間で傷跡は消えた。	右ひじを複雑骨折し、さらにじん帯も損傷 し、1ヶ月半入院し、さらに3ヶ月通院した。
D	右足と手のひらにすり傷ができた が、10日で傷跡は消えた。	ろっ骨を3本折り、1ヶ月半入院し、さら に2ヶ月通院した。

“かなり小さな(1)”)。

②加害者、被害者に関する評定

③責任、④類似性、および⑤行動評価について、加害者、および被害者に対

する評価をさせた。なお、加害者と被害者の評定順序は被験者ごとに異なるようにした。

④責任： 一般的責任（事故が起きたことに関して，“かなり責任がある(7)”～“まったく責任がない(1)”）、および道義的責任（事故に関して，“かなり非難されるべきである(7)”～“まったく非難されるべきでない(1)”）を、加害者、被害者の両者について判断させた。賠償責任（被害者の医療費を，“全額負担すべきである(7)”～“まったく負担する必要がない(1)”）、および法的責任（法的に，“最大限可能な罰を受けるべきである(7)”～“まったく罰を受ける必要がない(1)”）については、加害者に対してのみ判断させた。

⑤類似性・好ましさ： 性格、態度や行動の点での当事者と自分との類似性（“かなり似ている(7)”～“まったく似ていない(1)”）、当事者の好意度（“かなり好ましい(7)”～“まったく好ましくない(1)”）について評定させた。

⑥行動評価： 当事者のふだんの交通法規遵守度（“しっかり守っている(7)”～“まったく守っていない(1)”）、当事者の注意深さ（“かなり注意深い(7)”～“かなり不注意である(1)”）を推定させた。

また、当事者の立場になった場合を想定させ、一般の人々あるいは自分がその事故が起きる前にどのくらい注意深い何らかの行動をとったかを推定させた（サンプルに基づく合意性推定：“すべての人が注意深い行動をとった(7)”～“誰も注意深い行動をとらなかった(1)”；自己に基づく合意性推定：“自分であれば注意深い行動をとった(7)”～“自分であれば注意深い行動をとらなかった(1)”）。

その他

4つの事故ケースについて評定させた後、被験者自身の運転免許取得の有無、日ごろ通学その他で運転する乗り物、および交通事故経験の有無について尋ねた。さらに、被験者自身の交通法規遵守度、および注意深さについて7点尺度で自己評定させた（“しっかり守っている(7)”～“まったく守っていない(1)”；“かなり注意深い(7)”～“かなり不注意である(1)”）。

結 果

被験者の選別

通学その他での50ccバイクの日常的利用に関する回答に基づき、日常的に利用しているバイク通学者（男子42名、女子29名）と利用していない非バイク通

学者（男子31名，女子51名）とに被験者を選別した。なお，女子よりも男子のほうがバイク通学者に多く選別され（ $\chi^2_{(1)} = 6.95, p < .01$ ），さらに運転免許取得率も男子のほうが高かった（免許取得者：男子52名，女子40名， $\chi^2_{(1)} = 7.18, p < .01$ ）。非バイク通学者には，運転免許取得者が21名（男子10名，女子11名），日常的な自動車利用者が4名（男子2名，女子2名），日常的な自動2輪利用者が2名（男子2名），それぞれ含まれていた。

交通事故経験の有無については，男子では通学形態による差がなかったが（経験者：非バイク通学者14名，バイク通学者17名， $\chi^2_{(1)} = 0.16, ns.$ ），女子ではバイク通学者の経験率が高かった（経験者：非バイク通学者7名，バイク通学者10名， $\chi^2_{(1)} = 4.76, p < .05$ ）。なお，女子に比べ男子のほうが交通事故経験率が高く（経験者：男子31名，女子17名， $\chi^2_{(1)} = 7.98, p < .01$ ），とくに被害経験率が高かったが，加害経験率において性差はなかった（被害経験者：男子25名，女子12名， $\chi^2_{(1)} = 7.71, p < .01$ ；加害経験者：男子13名，女子7名， $\chi^2_{(1)} = 2.76, ns.$ ）。

被験者自身の法規遵守度と注意深さについて性×通学形態の分散分析（一括投入型回帰的分析法）を行ったが，何の有意な効果も認められなかった（法規遵守度：性の主効果， $F = 1.13$ ；通学形態の主効果， $F = 0.05$ ；交互作用， $F = 1.50$ ／注意深さ：それぞれ， $F = 0.03, F = 0.06, F = 1.14$ ，すべて $ns.$ ， $df = 1/149$ ）。全体の平均値は，それぞれ4.42，4.32であり，尺度上のほぼ中性点付近であるといえる。

結果の重大さおよび個人的関連性の効果

前述したように，被験者をバイク通学者と非バイク通学者とに選別したが，バイク通学者にとってバイク加害者条件では加害者，バイク被害者条件では被害者との個人的関連性が高いといえる。各測度について被験者の性×通学形態×立場×重大さ（後2要因は被験者内要因）の分散分析を行った（主効果，および交互作用，いずれも $df = 1/149$ ）。なお，各セル内の人数が不均等であるため一括投入型回帰的分析法を用いた。条件別平均値を Table 3，4，5 に示す。仮説Ⅰについては重大さの主効果，仮説Ⅱ - a，bについては通学形態×立場×重大さの交互作用がとくに責任帰属測度でそれぞれ期待される。

(1)事故に関する評定

①事故の生起率：立場の主効果のみが有意であり（ $F = 4.68, p < .05$ ），バイク被害者条件よりもバイク加害者条件で事故の生起可能性が高いと見做された。いずれの条件でも平均評定値が5点以上であり，設定した事故ケースの

Table 3
事故に関する評定の条件別平均値

		非バイク通学者				バイク通学者			
		バイク - 加害者		バイク - 被害者		バイク - 加害者		バイク - 被害者	
		mild	severe	mild	severe	mild	severe	mild	severe
N	男	31	31	31	31	42	42	42	42
	女	51	51	51	51	29	29	29	29
事故の生起率	男	5.94	5.61	5.71	5.84	5.76	5.71	5.64	5.62
	女	6.12	6.10	5.82	5.49	6.17	6.07	6.00	5.93
被害者になる可能性	男	4.81	5.13	5.19	5.23	4.93	4.81	5.50	5.33
	女	5.25	5.47	4.88	5.06	5.31	4.79	5.55	5.76
加害者になる可能性	男	5.32	4.94	4.26	4.26	5.40	5.50	4.45	4.67
	女	4.80	5.27	4.22	4.39	5.86	6.17	4.21	3.86
事故の重大さ	男	4.65	5.71	4.71	5.71	4.67	5.98	4.67	5.76
	女	4.80	5.96	4.78	5.86	5.07	6.14	5.03	6.07

Table 4
加害者に関する評定の条件別平均値

		非バイク通学者				バイク通学者			
		バイク - 加害者		バイク - 被害者		バイク - 加害者		バイク - 被害者	
		mild	severe	mild	severe	mild	severe	mild	severe
一般的責任	男	5.32	6.13	5.23	5.19	5.43	5.93	5.43	5.67
	女	5.27	5.76	4.90	5.39	5.41	5.62	5.24	5.66
道義的責任	男	5.03	5.45	5.03	4.84	5.21	5.48	5.10	5.38
	女	4.78	5.14	4.59	5.14	4.97	5.00	4.93	5.28
賠償責任	男	5.74	6.16	5.35	5.55	5.79	5.83	5.29	5.67
	女	5.43	5.71	4.90	5.51	5.31	5.66	5.31	5.79
法的責任	男	4.42	5.16	4.16	4.52	4.79	5.40	4.50	5.24
	女	4.35	4.98	3.98	4.67	4.45	4.76	4.48	5.14
類似性	男	4.32	4.16	4.06	4.13	4.48	4.45	4.07	4.19
	女	4.47	4.33	4.08	4.16	4.66	4.69	4.14	4.28
好ましさ	男	4.10	3.68	4.03	4.03	3.95	4.05	3.86	3.98
	女	4.27	4.25	4.22	4.08	4.10	4.14	3.93	4.03
法規遵守度	男	4.39	3.84	4.52	4.19	3.88	4.38	4.17	4.33
	女	4.49	4.33	4.43	4.43	4.38	4.66	4.45	4.24
注意深さ	男	3.84	3.23	3.58	3.48	3.40	4.12	3.43	3.40
	女	4.02	3.90	3.57	3.39	3.62	3.90	3.45	3.17
サンプルに基づく合意性推定	男	4.35	4.19	4.26	4.13	3.86	4.26	4.00	4.02
	女	3.92	4.24	4.31	4.29	4.17	4.00	4.03	4.07
自己に基づく合意性推定	男	4.68	4.48	4.61	4.55	4.40	4.71	4.57	4.52
	女	4.49	4.73	4.69	4.82	4.48	4.72	4.79	4.48

Table 5
被害者に関する評定の条件別平均値

		非バイク通学者				バイク通学者			
		バイク - 加害者		バイク - 被害者		バイク - 加害者		バイク - 被害者	
		mild	severe	mild	severe	mild	severe	mild	severe
一般的責任	男	4.19	4.23	4.23	4.52	3.48	3.90	4.71	4.86
	女	4.24	4.14	4.75	4.65	4.48	4.59	4.31	4.72
道義的責任	男	3.84	3.87	3.87	4.03	3.29	3.57	4.36	4.55
	女	3.76	3.69	4.31	4.22	3.86	4.07	4.07	4.38
類似性	男	3.90	4.06	4.19	3.94	4.00	3.81	4.17	4.26
	女	4.06	4.16	4.35	4.22	4.14	4.03	4.66	4.72
好ましさ	男	3.81	3.87	3.87	4.00	3.93	3.83	3.90	4.00
	女	3.90	3.84	4.22	3.96	3.86	3.83	4.24	3.97
法規遵守度	男	3.97	3.94	4.29	4.03	4.05	3.90	4.10	4.02
	女	3.92	4.16	4.37	4.45	4.14	4.14	4.66	4.48
注意深さ	男	3.16	3.48	3.58	2.87	3.43	3.17	3.19	3.10
	女	3.24	3.35	3.53	3.47	3.21	3.07	3.83	3.69
サンプルに基づく 合意性推定	男	4.10	3.84	4.29	4.39	3.29	3.88	3.83	4.14
	女	3.84	3.84	4.16	4.20	3.34	3.48	4.24	4.14
自己に基づく 合意性推定	男	4.39	4.13	4.81	5.16	3.52	4.21	4.24	4.79
	女	4.33	4.02	4.75	4.82	3.45	3.97	4.69	4.62

被験者にとっての状況的関連性は十分に高いといえる。

②被害者・加害者になる可能性： 立場の主効果が有意で（それぞれ， $F=4.29$ ， $p<.05$ ； $F=68.50$ ， $p<.001$ ），バイク被害者条件では被害者に，バイク加害者条件では加害者に，それぞれおかれる可能性が高く見積もられた。しかし，両測度ともに通学形態×立場の有意な交互作用が得られ（それぞれ， $F=7.24$ ， $p<.01$ ； $F=5.49$ ， $p<.05$ ），バイク通学者の場合にこれらの傾向が顕著であった。加害者となる可能性では性×通学形態×立場の交互作用も有意で（ $F=5.12$ ， $p<.05$ ），女子のバイク通学者でこの傾向がより顕著であった。

③事故の重大さ： 重大さの主効果のみが有意で（ $F=125.54$ ， $p<.001$ ），期待通り，severe 条件のほうが mild 条件よりも重大であると見做された。

(2)加害者に関する評定

①責任： 4 測度すべてで、仮説Ⅰと一致して、重大な結果を伴う事故のほうが責任帰属が強まる重大さの主効果が有意であった（一般的責任： $F=15.62$, $p<.001$ ；道義的責任： $F=6.32$, $p<.05$ ；賠償責任： $F=15.44$, $p<.001$ ；法的責任： $F=43.39$, $p<.001$ ）。一般的、賠償、および法的責任では、立場の主効果が有意で（それぞれ、 $F=11.13$, $p<.001$ ； $F=11.44$, $p<.001$ ； $F=5.14$, $p<.05$ ）、バイク被害者条件よりもバイク加害者条件において加害者への責任帰属が強まった。法的責任では、通学形態の主効果も有意で（ $F=4.15$, $p<.05$ ）、バイク通学者が非バイク通学者よりも加害者へ大きい責任を帰属した。

また、一般的、および法的責任では、通学形態×立場の有意な交互作用が得られ（それぞれ、 $F=4.45$, $p<.05$ ； $F=4.67$, $p<.05$ ）、非バイク通学者がバイク被害者の事故での加害者にあまり責任を帰属しないことを示した。これは、先の立場の主効果を限定するもので、仮説Ⅱ - a, b を部分的に支持する。

②類似性・好ましさ： 類似性に関しては、立場の主効果のみが有意で（ $F=14.73$, $p<.001$ ）、バイク被害者条件よりもバイク加害者条件で類似性が高く評価された。しかし、好ましさに関しては何の有意な効果も認められなかった。

③行動評価： 法規遵守度については、有意な性の主効果がみられ（ $F=3.90$, $p<.05$ ）、男子よりも女子のほうが加害者に寛大であった。さらに、通学形態×重大さの交互作用も有意であり（ $F=5.64$, $p<.05$ ）、非バイク通学者では mild 条件のほうで、バイク通学者では severe 条件のほうで、加害者の法規遵守度が高く評価された。また、バイク被害者条件よりもバイク加害者条件のほうが加害者は注意深い行動をとったとする立場の主効果が有意であった（ $F=13.07$, $p<.001$ ）。合意性推定の両測度に関しては何の有意な効果もなかった。

(3)被害者に関する評定

①責任： 一般的、および道義的責任では、立場の有意な主効果が得られ（ $F=13.43$, $p<.001$ ； $F=17.66$, $p<.001$ ）、バイク加害者条件よりもバイク被害者条件で被害者への責任帰属が高まった。また、両測度で性×通学形態×立場の交互作用が有意で（一般的責任： $F=9.40$, $p<.01$ ；道義的責任： $F=7.00$, $p<.01$ ）、男子のバイク通学者と女子の非バイク通学者が、バイク加害者条件での被害者に責任を帰属せず、バイク被害者条件では大きい責任を帰属する傾向があった。男子の傾向は仮説Ⅱ - a, b に反するが、女子の傾向は一

致する。

②類似性・好ましさ： 類似性に関しては、性および立場の主効果が有意で（それぞれ、 $F=3.91, p<.05$ ； $F=15.42, p<.001$ ），男子よりも女子のほうで、バイク加害者条件よりもバイク被害者条件のほうで、被害者と自己とが類似していると認知された。また、有意な通学形態×立場の交互作用が得られ（ $F=4.84, p<.05$ ），仮説Ⅱ - a, bと一致して、バイク通学者がバイク被害者条件での被害者との類似性を認知した。

好ましさに関しては、バイク加害者条件よりもバイク被害者条件で被害者を高く評価する立場の主効果が有意であった（ $F=12.43, p<.001$ ），また、性×重大さの交互作用も有意で（ $F=5.20, p<.05$ ），女子の mild 条件で被害者が高く評価された。これは、仮説Ⅰと一致する。

③行動評価： 法規遵守度では、性および立場の主効果が有意で（それぞれ、 $F=6.61, p<.05$ ； $F=15.25, p<.001$ ），男子よりも女子で、バイク加害者条件よりもバイク被害者条件で、被害者が高く評価された。

注意深さでは、性×立場と通学形態×立場×重大さの交互作用がそれぞれ有意であった（ $F=10.70, p<.001$ ； $F=4.98, p<.05$ ）。前者は、男子はバイク加害者条件で被害者を高く評価するが、女子では逆の傾向があることを示す。後者に関しては、非バイク通学者では、バイク被害者条件で重大さ依存 - 責任帰属仮説と一致する傾向がみられるのに、バイク加害者条件で逆の傾向があり、さらに、バイク通学者では、いずれも仮説Ⅰに一致する傾向が認められた。

次に合意性推定の評定をみると、両測度ともに、通学形態および立場の主効果が有意で（サンプルに基づく合意性推定：それぞれ、 $F=4.56, p<.05$ ， $F=24.24, p<.001$ ；自己に基づく合意性推定： $F=5.93, p<.05$ ， $F=.43, p<.001$ ），バイク通学者よりも非バイク通学者で、バイク加害者条件よりもバイク被害者条件で、被害者を厳しく評価した。また、自己に基づく合意性推定では有意な通学形態×重大さの交互作用が得られ（ $F=4.83, p<.05$ ），バイク通学者が仮説Ⅰと一致して mild 条件より severe 条件で被験者を厳しく評価した。

判断者によって知覚された関連性に基づく検討

4つの事故ケースに対する反応を独立と見做し、次の分析を行った。1) 事故の生起可能性が高く見積もられている（評定値5, 6, 7），2) 加害者、被害者のいずれか一方の立場になる可能性が高く見積もられている（評定値5, 6, 7），という基準に基づき、各ケースを加害者 - 関連、被害者 - 関連の条

件に選別した。すなわち、状況的関連性が高く知覚され、加害者、被害者のいずれか一方にのみ個人的関連性を知覚している事故ケースのみ分析対象とした。

これらの事故ケースでは、関連性の方向と事故の重大さとの間には男女とも関係は認められなかった（severe 条件のケース —— 男子：加害者 - 関連条件36ケース中16ケース，被害者 - 関連条件45ケース中22ケース， $\chi^2_{(1)} = 0.16$, ns.；女子：加害者 - 条件31ケース中21ケース，被害者 - 関連条件75ケース中42ケース， $\chi^2_{(1)} = 1.25$, ns.）。しかし、関連性の方向とバイク運転手の立場との間には、男女ともに、加害者 - 関連条件にはバイク加害者条件の事故ケースが（男子27ケース，女子23ケース），被害者 - 関連条件にはバイク被害者条件の事故ケースが（男子32ケース，女子55ケース）有意に多く含まれる傾向があった（男子： $\chi^2_{(1)} = 17.01$, $p < .001$ ；女子： $\chi^2 = 20.55$, $p < .001$ ）。この偏りは、事故に関する評定での先述の傾向から当然である。

以上に述べた事故ケースの選別に基づき、被験者の性×関連性の分散分析を行った（主効果，および交互作用，いずれも $df = 1/183$ ）。なお，各セル内の人数が不均等であるため一括投入型回帰的分析法を用いた。条件別平均値を Table 6, 7に示す。

Shaver らの防衛的帰属仮説に従えば，加害者に関しては加害者－関連条件で，被害者に関しては被害者－関連条件で，それぞれ寛大な評価がされる関連性の主効果が期待される。

Table 6
事故に関する評定の条件別平均値 —— 関連性の方向 ——

N	男子		女子	
	加害者	被害者	加害者	被害者
	- 関連 36	- 関連 45	- 関連 31	- 関連 75
事故の生起率	5.94	6.07	6.03	6.04
被害者になる可能性	2.92	6.00	3.10	5.76
加害者になる可能性	5.86	2.33	5.81	2.91
事故の重大さ	5.08	5.04	5.58	5.48

(1)事故に関する評定

被害者になる可能性および加害者になる可能性に関しては，関連性の主効果のみが有意で（それぞれ， $F = 407.53$, $p < .001$ ； $F = 381.21$, $p < .001$ ），

Table 7

加害者および被害者に関する評定の条件別平均値 ——— 関連性の方向 ———

	【 加害者に関する評定 】				【 被害者に関する評定 】			
	男 子		女 子		男 子		女 子	
	加害者 - 関連	被害者 - 関連	加害者 - 関連	被害者 - 関連	加害者 - 関連	被害者 - 関連	加害者 - 関連	被害者 - 関連
一般的責任	5.83	5.89	5.00	5.72	4.08	4.36	4.74	4.59
道義的責任	4.92	5.56	4.42	5.37	3.69	3.98	3.94	4.12
賠償責任	5.61	5.82	5.26	5.68				
法的責任	4.67	4.89	4.13	4.95				
類似性	4.28	3.58	4.77	3.83	3.42	4.53	3.68	4.29
好ましさ	4.00	3.80	4.45	3.99	3.83	3.96	3.90	4.03
法規遵守度	4.00	3.96	4.94	4.17	3.97	3.93	4.10	4.36
注意深さ	3.61	3.29	4.13	3.31	3.08	3.36	3.03	3.52
サンプルに 基づく合意性推定	4.14	4.47	3.71	4.37	3.92	3.91	3.65	4.04
自己に 基づく合意性推定	4.56	4.96	4.29	4.95	4.39	4.24	4.32	4.49

選別の仕方と一致して、加害者－関連条件で加害者に、被害者－関連条件で被害者に、それぞれおかれる可能性が高いと見積もられた。事故の生起率に関しては何の有意な効果も認められなかった。

事故の重大さでは、男子よりも女子で事故が重大であると見做す性の主効果が有意であった ($F=4.83, p<.05$)。

(2)加害者に関する評定

①責任：賠償責任を除く3測度で、Shaverらの防衛的帰属仮説と一致して、関連性の主効果が有意で（一般的責任： $F=4.05, p<.05$ ；道義的責任： $F=17.29, p<.001$ ；法的責任： $F=6.13, p<.05$ ），被害者－関連条件よりも加害者－関連条件で加害者にあまり責任を帰属しなかった。また，一般的責任では，有意な性の主効果が得られ ($F=6.76, p<.01$)，女子よりも男子で大きい責任帰属をした。

②類似性・好ましさ：両測度ともに性および関連性の主効果が有意であった（類似性：それぞれ， $F=4.50, p<.05, F=21.99, p<.001$ ；好ましさ： $F=4.82, p<.05, F=5.23, p<.05$ ）。これらの主効果は，男子よりも女子で，被害者－関連条件よりも加害者－関連条件で，類似性および好ましさの評

価が高いことを示す。後者の傾向は防衛的帰属仮説と一致する。

③行動評価： 4 測度すべてで、有意な関連性の主効果が得られ、被害者－関連条件で、加害者－関連条件で、加害者が寛大に評価された（法規遵守度： $F=4.41, p<.05$ ；注意深さ： $F=7.27, p<.01$ ；サンプルに基づく合意性推定： $F=6.78, p<.01$ ；自己に基づく合意性推定： $F=5.64, p<.05$ ）。これらの傾向は防衛的帰属仮説と一致する。また、法規遵守度で、性の主効果が有意で（ $F=9.01, p<.01$ ），男子よりも女子のほうが加害者を寛大に評価した。

(3)被害者に関する評定

被害者に関しては、類似性および注意深さでの関連性の主効果のみが有意であった（それぞれ、 $F=22.78, p<.001$ ； $F=5.15, p<.05$ ）。これらの主効果は、加害者－関連条件よりも被害者－関連条件で被害者が自己と類似しており、注意深いと見做す傾向が強いことを示す。

事故判断における次元

呈示した事故に対するさまざまな判断における潜在的次元を探るために因子分析を行った。各事故ケースでの評定を独立と見做し、事故に関する評定（4 項目）、加害者に関する評定（10項目）、および被害者に関する評定（8 項目）について因子分析（主因子法）を行った。固有値 ≥ 1.00 を基準として6 因子を抽出した。Table 8にその結果を示す。直交回転後の因子負荷量.350を基準として各因子の解釈を行った。

第Ⅰ因子は“加害者の責任”，第Ⅱ因子は“加害者の人格・行動評価”を表し、これに対応して第Ⅳ因子，第Ⅴ因子はそれぞれ“被害者の責任”，“被害者の人格・行動評価”を表すと解釈される。さらに，第Ⅲ因子は“自他の行動推定”と解釈され，第Ⅵ因子は“事故の生起可能性”を表すと考えられる。

なお，同様の因子分析を男女別に行ったところ，全体での第Ⅲ因子である“自他の行動推定”が男子では加害者と被害者とに分離した以外は，全体で得られた因子と一致していた。

一般的責任，サンプルに基づく合意性推定，および自己に基づく合意性推定の関係

一般的責任，および合意性推定の両測度のそれぞれの間のピアソン相関，および一般的責任を従属変数とし合意性推定の両測度を説明変数とする重回帰分析（一括投入法）の結果を Table 9, 10に示す。ここでは，Hagiwara（1983）の用いたストーリーが自動車運転手が加害者であり歩行者が被害者であったこと

Table 8

事故状況に関する評定の因子分析の結果（主因子法，直交回転後の因子負荷量） $N=612$

説明率：64.9%	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	第Ⅴ因子	第Ⅵ因子
【 事故に関する評定 】						
事故の生起率	.048	.051	.059	.002	.056	.643
被害者になる可能性	.052	-.102	-.023	.044	.180	.524
加害者になる可能性	-.023	.131	-.117	-.080	-.112	.464
事故の重大さ	.212	.094	.027	.048	.019	.279
【 加害者に関する評定 】						
一般的責任	.814	-.165	.101	.025	.087	.100
道義的責任	.838	-.291	.079	.068	.108	.052
賠償責任	.761	-.047	.024	-.181	.071	.077
法的責任	.816	-.164	.089	-.007	-.002	.018
類似性	.025	.395	-.253	.043	-.020	.217
好ましさ	-.181	.711	-.019	.046	.083	.005
法規遵守度	-.174	.794	.080	.034	.057	.101
注意深さ	-.193	.819	-.034	.045	.015	-.010
サンプルに基づく合意性推定	.190	-.177	.595	-.040	.038	.064
自己に基づく合意性推定	.147	-.295	.707	-.097	.002	.049
【 被害者に関する評定 】						
一般的責任	-.067	.080	.110	.859	-.244	.043
道義的責任	-.008	.069	.122	.900	-.251	-.015
類似性	.081	-.080	-.235	.072	.475	.265
好ましさ	.047	.030	.003	-.120	.570	-.052
法規遵守度	.047	.062	.027	-.132	.600	.081
注意深さ	.043	.078	-.093	-.202	.733	.000
サンプルに基づく合意性推定	-.007	.163	.588	.214	-.094	-.034
自己に基づく合意性推定	-.013	.153	.648	.232	-.165	-.086

を考慮して、バイク加害者条件とバイク被害者条件とに分けた結果も検討する。

まず、ピアソン相関についてみる。バイク加害者条件での加害者に関する男子の結果を除き、1) 3 測度いずれの組み合わせでも有意な正の相関がある、2) 合意性推定の両測度間の相関が高い、という結果が、全体および男女各サンプルで得られた。これらは、Hagiwara (1983) の結果と一致する。バイク加害者条件での男子では、一般的責任と合意性推定の両測度間の相関が有意でなかったが、合意性推定の両測度間の相関は有意であり高かった。

Table 9

一般的責任，サンプルに基づく合意性推定，および自己に基づく合意性推定の関係(ピアソン相関)

	【 加害者に関する評定 】			【 被害者に関する評定 】		
	一般的責任	一般的責任	サンプル	一般的責任	一般的責任	サンプル
	サンプル ⁽¹⁾	自己 ⁽²⁾	自己	サンプル ⁽¹⁾	自己 ⁽²⁾	自己
全体 N=612	.252 a	.267 a	.627 a	.257 a	.303 a	.643 a
男子 N=292	.160 b	.186 a	.661 a	.271 a	.332 a	.652 a
女子 N=320	.344 a	.352 a	.595 a	.245 a	.271 a	.634 a
【 バイク加害者条件 】						
全体 N=306	.267 a	.269 a	.626 a	.290 a	.268 a	.700 a
男子 N=146	.152	.143	.597 a	.314 a	.264 a	.667 a
女子 N=160	.376 a	.403 a	.653 a	.278 a	.284 a	.730 a
【 バイク被害者条件 】						
全体 N=306	.249 a	.275 a	.628 a	.169 b	.282 a	.546 a
男子 N=146	.164 c	.224 b	.719 a	.164 c	.339 a	.619 a
女子 N=160	.341 a	.330 a	.535 a	.174 c	.216 b	.466 a

a: $p < .001$; b: $p < .01$; c: $p < .05$

(1)サンプルに基づく合意性推定

(2)自己に基づく合意性推定

Table 10

一般的責任に対する，サンプルに基づく合意性推定，および自己に基づく合意性推定の規定度
(重回帰分析の結果：標準偏回帰係数)

	【 加害者に関する評定 】			【 被害者に関する評定 】		
	サンプル ⁽¹⁾	自己 ⁽²⁾		サンプル	自己	
全体	.140 b	.180 a	$R^2 = .083$ a	.106 c	.235 a	$R^2 = .098$ a
男子	.066	.143	$R^2 = .037$ b	.095	.270 a	$R^2 = .116$ a
女子	.209 a	.228 a	$R^2 = .152$ a	.123	.193 a	$R^2 = .082$ a
【 バイク加害者条件 】						
全体	.162 c	.167 c	$R^2 = .088$ a	.200 b	.128	$R^2 = .092$ a
男子	.104	.081	$R^2 = .027$.250 c	.097	$R^2 = .104$ a
女子	.196 c	.275 b	$R^2 = .185$ a	.152	.173	$R^2 = .092$ a
【 バイク被害者条件 】						
全体	.126	.196 b	$R^2 = .085$ a	.022	.270 a	$R^2 = .080$ a
男子	.005	.221	$R^2 = .050$ c	-.074	.385 a	$R^2 = .119$ a
女子	.231 b	.207 c	$R^2 = .147$ a	.094	.172 c	$R^2 = .054$ c

a: $p < .001$; b: $p < .01$; c: $p < .05$

(1)サンプルに基づく合意性推定

(2)自己に基づく合意性推定

次に重回帰分析の結果についてみる。まず、加害者に関する結果を述べる。男子では、合意性推定の両測度ともに一般的責任を有意に規定しているとはいえなかった。しかし、女子では、合意性推定の両測度とも一般的責任をほぼ同程度に有意に規定していた。

次に被害者での結果について述べる。バイク加害者条件とバイク被害者条件をまとめた分析では、Hagiwara (1983) の結果と一致して、サンプルに基づく合意性推定に比べ、自己に基づく合意性推定が一般的責任に強く影響していると結論される。しかし、条件別にみると、バイク被害者条件ではHagiwara (1983) と一致する傾向が男女とも明確に生じているのに、バイク加害者条件では、性差がみられた。男子では、サンプルに基づく合意性推定のみが一般的責任に強く影響しているのに、女子では、合意性推定の両測度ともに有意水準に達しなかった。

考 察

防衛的帰属仮説の検討

防衛的帰属仮説について、本実験では2通りの分析を行った。

まず、結果の重大さ(仮説Ⅰ)と個人的関連性の効果(仮説Ⅱ-a, b)に関して検討した分析の結果について論じる。

Walster (1966) が提起した重大さ依存-責任帰属仮説は、加害者に対する責任帰属の4測度でのみ直接に支持された。その他、被害者の好ましき評価の女子、および被害者についての自己に基づく合意性推定のバイク通学者で、この仮説と一致する傾向が得られた。しかし、重大な被害を与えた者により重い罰を課するという法的原理の単純な反映として加害者に対する責任帰属がなされるのではないことを、今後の研究において、実証する必要がある。すなわち、Thornton (1984) や Thornton *et al.* (1986) が示したように、重大な結果を伴う事故が被験者に認知的脅威をもたらし、それが当事者への原因帰属を引き起こすことを明らかにしなければならない。

個人的関連性の効果については、被害者の注意深さの評定を除き、重大さの効果を含めた支持を得ることができなかった。つまり、バイク運転手が被害者のときには mild 条件で、バイク運転手が加害者のときには severe 条件で、非バイク通学者は被害者がより注意深い行動をとったものと判断した。しかし、バイク通学者は、いずれの場合も mild 条件で被害者の行動を高く評価してい

た。

加害者に対する一般的責任と法的責任に関してみると、非バイク通学者は、バイク運転手が被害者であるときの加害者に対する責任帰属を弱める傾向があった。被害者に関しては、バイク通学者が、被害者がバイク運転手であるときにより類似性を高く知覚した。また、被害者に対する一般的責任と道義的責任とで、女子の非バイク通学者が、バイク運転手が加害者のときに責任をあまり帰属せず、バイク運転手が被害者のときに大きい責任を帰属した。これらは、部分的であるが、関連性の効果に関する仮説を支持する。

ところで、本実験では、被害者が全体的にバイク運転手との間に個人的関連性を知覚する傾向が認められた。これは、50ccバイクの高い普及率から、1) 50ccバイクが被験者にとってひじょうに身近な存在である、2) 将来、被験者も利用する可能性が高い、ことによるのかもしれない。また、バイク運転手の年齢が一方の当事者に比べ被験者と類似していたために個人的関連性が知覚されたとも考えられる (Table 1 参照)。

いずれにせよ、本実験では、自己との個人的関連性が高いと知覚されてるバイク運転手に対する厳しい責任判断傾向が認められた。加害者に関しては、バイク運転手が被害者よりも加害者のときに、加害者に対する一般的、賠償、および法的責任が強められた。被害者に関しては、バイク運転手が加害者よりも被害者のときに、被害者に対する一般的、および道義的責任が強く帰属された。また、サンプル、および自己に基づく合意性推定でバイク運転手が加害者よりも被害者のときに同様に被害者に厳しい判断がされた。さらに、男子のみであるが被害者の注意深さで同様な傾向があった。これらに対応して、加害者に対する法的責任でバイク通学者が厳しい判断をした。これは、萩原ら (1977)、および Hagiwara (1983) が運転免許取得者で得た傾向と一致している。

しかし、これらと逆に、バイク運転手に対する好意的評価の傾向もあった。加害者に関しては、バイク運転手が被害者よりも加害者のときに、加害者と自己との類似性を知覚し、加害者が注意深い行動をとったと見做した。被害者に関して、バイク運転手が加害者よりも被害者のときに、被害者と自己との間に類似性を知覚し、被害者の法規遵守度も高く評定した。また、女子のみであるが被害者の注意深さで同様な傾向があった。これに対して、被害者についての合意性推定の両測度でバイク通学者が寛大な判断をした。

Bradley (1978) は、自己の遂行結果に関する原因帰属での防衛的帰属仮説の妥当性を検討する中で、肯定的自己像を維持・獲得したいという願望が

原因帰属を方向づける可能性を示唆した。本結果、萩原ら（1977）、および Hagiwara（1983）の結果は、この自己呈示仮説に基づき解釈できるかもしれない。事故ストーリーの中での50ccバイク運転手に厳しい責任を課すことによって自らが高い交通安全意識をもつことを示したかったのかもしれない。しかし、本実験では、自己と50ccバイク運転手とを区別せず逆に行動的評価を高めたことは興味深い。いずれにせよ、ボーガスパイプライン技法を用い、自己の遂行結果に関する原因帰属についての自己呈示仮説を実験的に検討した Riess *et al.* (1981) のように、被験者の反応水準（私的 vs 公的）を操作する必要がある。

本実験では、バイク利用者が、交通事故ストーリーに登場するバイク運転手との間に日常的な個人的関連性を知覚すると考えた。バイク通学者は、バイク加害者条件では加害者の立場に、バイク被害者条件では被害者の立場に、それぞれおかれる可能性が高いと判断していることから、この仮定は妥当であったといえよう。しかし、本実験では、加害者と被害者のいずれか一方のみと個人的関連性が知覚されるように操作したわけではない。そのため、いずれに対してもある程度の個人的関連性の知覚が生じていた可能性、いずれに対しても生じなかった可能性がある。

そこで、個人的関連性の効果に関する事後的分析を行った。つまり、事故に関する評定に基づいて、加害者、被害者いずれか一方にのみ個人的関連性が知覚されたケースについて分析を行った。加害者評定では、賠償責任を除くすべての測度で、個人的関連性に関する防衛的帰属仮説と一致する傾向、すなわち、加害者との間に個人的関連性を知覚している者が加害者に寛大な判断をする傾向が得られた。しかし、被害者評定では、類似性と注意深さとの、防衛的帰属仮説に一致する傾向が得られたにすぎなかった。

これらの結果は、個人的関連性の効果が被害者よりも加害者の判断に強く作用することを示している。本実験では、加害者評定と被害者評定の順序を被験者ごとに変えてあるので、むしろ、評定順序の効果とは考えられない（加害者評定が先のケース —— 男子：加害者－関連条件15ケース、被害者－関連条件22ケース、 $\chi^2_{(1)} = 0.42$, *ns.*；女子：加害者－関連条件13ケース、被害者－関連条件43ケース、 $\chi^2_{(1)} = 2.09$, *ns.*；全体： $\chi^2_{(1)} = 2.63$, *ns.*）。

ところで、加害者との個人的関連性の知覚が加害者への寛大な判断を生じる一方で、被害者への厳しい判断、すなわち被害者への“責任転嫁”を生じるわけではない。このことは興味深い。残念ながら本実験では偶然性への帰属の測

度を用いていないが、被害者よりもむしろ偶然性に帰属している可能性が考えられる。また、被害者との個人的関連性の知覚が加害者への厳しい判断を生じながら、被害者への寛大な判断を生じているわけではない。これは、当該の事故状況での誰かに責任を帰属することで十分に脅威が低減されることを示唆する。いずれにせよ、Chaikin & Darley (1973) のように、加害者あるいは被害者のいずれか一方とのみ個人的関連性の知覚が生じるような実験的操作が必要であろう。

以上の他に、本実験では、男子に比べ女子が事故の当事者に寛大な評価をする傾向があった。この傾向が、最初の分析では、加害者評定での法規遵守度、被害者評定での類似性および法規遵守度で得られた。次に行った事後的分析では、加害者評定での一般的責任、類似性、好ましさ、および法規遵守度でみられた。興味深いことに、後者の分析では、女子が事故の結果が重大であると見做しているにもかかわらず、この傾向を示すことが認められた。交通事故の当事者に対する女子の寛大な評価は、交通安全教育の観点からは問題であるが、この傾向が同性の当事者に対する判断のみに限定されるのかも含め、今後さらに検討すべきであろう。

事故判断における次元

事故状況に関する諸評定の因子分析の結果では、合意性推定を除き、加害者と被害者とに分離し、かつ対応する次元が抽出された。その他、1) 責任測度については、先行研究での論議と異なり、一次的に評価されている、2) 当事者の“人格・行動”因子(第Ⅱ因子、第Ⅴ因子)は、人格上の責任と行動上の責任との区別が本研究で生じていないことを示す、という興味ある結果が得られた。しかし、本研究で用いられた測度が先行研究での責任次元の論議を十分に踏まえて作成されたものでないのを、今後さらに検討が必要といえよう。

一般的責任、サンプルに基づく合意性推定、および自己に基づく合意性推定

Hagiwara (1983) によれば、同一状況での自己の行動推定が、虚偽の合意性バイアスにより、他者の行動推定にまで拡大される。そして、彼は、これらの推定が当事者に対する責任帰属に影響をおよぼすが、自己の行動推定のほうがより強い影響を示すと考え、それを支持する結果を得た。

本実験でのピアソン相関の結果は彼の考えがほぼ妥当であることを示している。しかし、重回帰分析では、明白な性差と条件差とが生じた。つまり、Hagiwara (1983) の結果と一致して、一般的責任に対して、自己に基づく合意性推定が強い影響を示したのは、バイク運転手が被害者のときの被害者評定

のみであった。バイク運転手が加害者あるいは被害者のいずれの場合も、加害者評定においては、男子では有意な傾向が得られず、女子でのみ、合意性推定の両測度が一般的責任にほぼ同じ程度の影響を与えるといえる。また、バイク運転手が加害者のときの被害者評定において女子で有意な傾向が認められなかった。男子では、Hagiwara (1983) の結果とは逆に、サンプルに基づく合意性推定のみが一般的責任の有意な規定因であった。Hagiwara (1983) の実験では、運転手が常に加害者であり歩行者が被害者となる事故ストーリーを用い、加害者に関する評定を問題としている。本実験では、バイク加害者条件での加害者評定がこれに対応すると考えられるが、前述したように一致した結果は得られていない。

本実験の結果、大学生が関連性を抱き易く（事故に関する評定からこの仮定は妥当であろう）、被害者の立場におかれた者、すなわち被害者としてのバイク運転手に対する責任判断で Hagiwara (1983) の呈示したモデルの妥当性が確認された。しかし、このモデルは、情報处理的観点よりも、むしろ Janoff-Bulman *et al.* (1985) が示したように、後知恵効果による歪みも含めて考えたほうが適切であろう。

今後の課題

個人的関連性の方向を実験的に操作しながら、事故に対する認知的脅威と当事者への責任帰属との間の関係を中心にとりあげて、被験者自身の交通安全意識・行動などを媒介させ、研究を進めていく必要がある。また、本実験で使用了事故ケースには、1) 50cc バイク運転手以外の当事者の特徴が統制されていない、2) 加害者側の被害の有無について明確な記述がない、などの改善すべき点がある。

今後、防衛的帰属理論について実験的検討を加え、その理論的精緻化を図る一方、帰属理論的観点から現実の交通事故抑止対策を提言するための知見を提供していくべきであろう。

〈 付記 〉

- 1) 本論文作成にあたり御指導を賜った名古屋大学文学部辻敬一郎教授に深く謝意を表します。
- 2) 本論文での実験は、筆者の指導の下で、外山和之君（社会学科昭和61年度卒業、現在、下田南高校定時制課程社会科教諭）が卒業論文研究のために計画・実施した。
- 3) 本研究の概要は、日本心理学会第51回大会（1987年）において報告された。

- 4) 本研究の統計的処理にあたっては、名古屋大学大型計算機センターのSPSS 統計パッケージ(7-9版)を利用した。なお、混合要因の分散分析は、MANOVA サブプログラムによった。

Ⅲ. 引用文献

- 安藤忠夫 1985 交通事故の現状と対策 ジュリスト, **833**, 6-12.
- 新垣和子 1976 自然状況における原因帰属, 共感傾向, 当事者行動の評価に関する実験的研究 実験社会心理学研究, **16**, 27-39.
- Arkkelin, D., Oakley, T., & Mynatt, C. 1979 Effects of controllable versus uncontrollable factors on responsibility attributions : A single-subject approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 110-115.
- Bradley, G.W. 1978 Self-serving biases in the attribution process : A reexamination of the fact or fiction question. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 56-71.
- Brewer, M. B. 1977 An information-processing approach to attribution of responsibility. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 58-69.
- Burger, J.M. 1981 Motivational biases in the attribution of responsibility for an accident : A meta-analysis of the defensive-attribution hypothesis. *Psychological Bulletin*, **90**, 496-512.
- Chaikin, A.L., & Darley, J.M. 1973 Victim or perpetrator? : Defensive attribution of responsibility and the need for order and justice. *Journal of Personality and Social Psychology*, **25**, 268-275.
- Cordray, D.S., McMartin, J.A., & Shaw, J.I. 1975 Attribution of responsibility for a naturally occurring event : The 1973 Nobel Peace Prize. *Social Behavior and Personality*, **3**, 37-40.
- Dollinger, S. J. 1986 The need for meaning following disaster : Attributions and emotional upset. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **12**, 300-310.
- Fincham, F., & Hewstone, M. 1982 Social categorization and personal similarity as determinants of attribution bias : A test of defensive attribution. *British Journal of Social Psychology*, **21**, 51-56.
- Fishbein, M., & Ajzen, I. 1973 Attribution of responsibility : A theoretical note.

- Journal of Experimental Social Psychology*, **9**, 148-153
- Fulero, S. M., & Delara, C. 1976 Rape victims and attributed responsibility : A defensive attribution approach. *Victimology : An International Journal*, **1**, 551-563.
- Gleason, J. M., & Harris, V. A. 1976 Perceived freedom, accident severity and empathic value as determinants of the attribution of responsibility. *Social Behavior and Personality*, **4**, 171-176.
- Hagiwara, S. 1983 Role of self-based and sample-based consensus estimates as mediators of responsibility judgments for automobile accidents. *Japanese Psychological Research*, **25**, 16-28.
- 萩原 滋 1986 責任判断過程の分析 —— 心理学的アプローチ —— 多賀出版
- 萩原 滋・曾野佐紀子・佐野勝男 1977 日本人の「対人行動」への実験社会心理学的研究 —— 交通事故に対する「責任判断」への帰因的アプローチ —— 組織行動研究（慶應義塾大学産業研究所社会心理学研究班研究モノグラフ）, **3**, 3 - 39.
- Harvey, M. D. & Rule, B. G. 1978 Moral evaluations and judgments of responsibility. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **4**, 583-588.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. John Wiley & Sons. (対人関係の心理学 大橋正夫訳 誠信書房 1978)
- Howard, J. A. 1984 Societal influences on attribution : Blaming some victims more than others. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 494-505.
- Hyland, R., & Cooper, M. 1976 Internal-external control and attribution of responsibility for a positive accident. *Journal of Social Psychology*, **99**, 147-148.
- 石村善助・所 一彦・西村春夫(編) 1986 責任と罰の意識構造 多賀出版
- Janoff-Bulman, R. 1979 Characterological versus behavioral self-blame : Inquiries into depression and rape. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1798-1809.
- Janoff-Bulman, R., Timko, C., & Carli, L. L. 1985 Cognitive biases in blaming the victim. *Journal of Experimental Social Psychology*, **21**, 161-177.
- Jellison, J., & Mills, J. 1967 Effect of similarity and fortune of the other on attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **5**, 459-463.

- Jones, E. E., & Davis, K. E. 1965 From acts to dispositions : The attribution process in person perception. *Advances in Experimental Social Psychology*, **2**, 219-266.
- 加藤一郎・宮原守男・野村好弘(編) 1975 交通事故判例百選(第二版)別冊ジュリスト No.48 有斐閣
- Kelley, H. H. 1973 The process of causal attribution. *American Psychologist*, **28**, 107-128.
- 国吉和子 1979 交通事故における観察者の責任判断 —— 運転手への責任帰属 —— 日本グループ・ダイナミックス学会第27回大会発表論文集, 31-32.
- Lerner, M. J., & Miller, D. T. 1978 Just world résearch and the attribution process : Looking back and ahead. *Psychological Bulletin*, **85**, 1030-1051.
- Lowe, C. A., & Medway, F. J. 1976 Effects of valence, severity, and relevance on responsibility and dispositional attribution. *Journal of Personality*, **44**, 518-538.
- McArthur, L. A. 1972 The how and what of why : Some determinants and consequences of causal attribution. *Journal of Personality and Social Psychology*, **22**, 171-193.
- McKillip, J., & Posavac, E. J. 1975 Judgments of responsibility for an accident. *Journal of Personality*, **43**, 248-265.
- McMartin, J. A., & Shaw, J.I. 1977 An attributional analysis of responsibility for a happy accident : Effects of ability, intention, and effort. *Human Relations*, **30**, 899-918.
- Medway, F. J., & Lowe, C. A. 1975 Effects of outcome valence severity on attribution of responsibility. *Psychological Reports*, **36**, 239-246.
- 諸井克英 1983 不当な outcome の原因帰属に関する実験的研究 (I) —— Lerner- 正当世界仮説の検討 —— 実験社会心理学研究, **22**, 109-122.
- 長山泰久 1979 ドライバーの心理学 —— 運転センスの養成と防衛運転 —— 企業開発センター交通問題研究室
- Nogami, G. Y., & Streufert, S. 1983 The dimensionality of attributions of causality and responsibility for an accident. *European Journal of Social Psychology*, **13**, 433-436.

- 越智俊典 1986 交通事故の現状と対策 ジュリスト増刊総合特集, **42**, 8-12.
- Pallak, S. R., & Davies, J. M. 1982 Finding fault versus attributing responsibility using facts differently. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **8**, 454-459.
- Phares, E. J., & Wilson, K. G. 1972 Responsibility attribution : Role of outcome severity, situational ambiguity, and internal-external control. *Journal of Personality*, **40**, 392-406.
- Phillips, D. M. 1985 Defensive attribution of responsibility in juridic decisions. *Journal of Applied Social Psychology*, **15**, 483-501.
- Piaget, J. 1930 Le jugement moral chez l'enfant. Institut J.-J. Rousseau. (臨床児童心理学 Ⅲ —— 児童道德判断の発達 —— 大伴 茂訳 同文書院 1974)
- Pliner, P., & Cappell, H. 1977 Drinking, driving, and the attribution of responsibility. *Journal of Studies on Alcohol*, **38**, 593-602.
- Riess, M., Rosenfeld, P., Melburg, V., & Tedeschi, J. T. 1981 Self-serving attributions : Biased private perceptions and distorted public descriptions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **41**, 224-231.
- Rotter, J. B. 1966 Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, **80**, 1-28.
- Sadow, D. C., & Laird, J. D. 1981 'Irrational' attributions of responsibility : Who's to blame for them? *European Journal of Social Psychology*, **11**, 427-430.
- 作田啓一 1972 価値の社会学 岩波書店
- Schiavo, R. S. 1973 Locus of control and judgments about another's accidents. *Psychological Reports*, **32**, 483-488.
- Schroeder, D. A., & Linder, D. E. 1976 Effects of actor's causal role, outcome severity, and knowledge of prior accidents upon attributions of responsibility. *Journal of Experimental Social Psychology*, **12**, 340-356.
- Seligman, C., Paschall, N., & Takata, G. 1974 Effects of physical attractiveness on attribution of responsibility. *Canadian Journal of Behavioral Science*, **6**, 290-296.
- Shaver, K. G. 1970-a Redress and the conscientiousness in the attribution of responsibility for accidents. *Journal of Experimental Social Psychology*, **6**, 100-110.
- Shaver, K. G. 1970-b Defensive attribution : Effects of severity and relevance

- on the responsibility assigned for an accident. *Journal of Personality and Social Psychology*, **14**, 101-113.
- Shaver, K. G. 1975 *An introduction to attribution process*. Winthrop Publishers.
(帰属理論入門 —— 対人行動の理解と予測 —— 稲松信雄・生熊讓二訳 誠信書房 1981)
- Shaw, J. I., & McMartin, J. A. 1975 Perpetrator or victim? Effects of who suffers in an automobile accident on judgemental strictness. *Social Behavior and Personality*, **3**, 5-12.
- Shaw, J. I., & McMartin, J. A. 1977 Personal and situational determinants of attribution of responsibility for an accident. *Human Relations*, **30**, 95-107.
- Shaw, J. I., & Skolnick, P. 1971 Attribution of responsibility for a happy accident. *Journal of Personality and Social Psychology*, **18**, 380-383.
- Sosis, R. H. 1974 Internal-external control and the perception of responsibility of another for an accident. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 393-399.
- Stokols, D. & Schopler, J. 1973 Reactions to victims under conditions of situational detachment : The effects of responsibility, severity, and expected future interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **25**, 199-209.
- SU きゃんぱす 1986 昭和61年度前半期静大生の交通事故白書 静岡大学学生部広報, **12**, 1-4.
- Thornton, B. 1984 Defensive attribution of responsibility : Evidence for an arousal-based motivational bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 721-734.
- Thornton, B., Hogate, L., Moirs, K., Pinette, M., & Presby, W. 1986 Physiological evidence of an arousal-based motivational bias in the defensive attribution of responsibility. *Journal of Experimental Social Psychology*, **22**, 148-162.
- 所 一彦・細井洋子 1986 責任研究の理論 石村善助・所 一彦・西村春夫(編) 責任と罰の意識構造 (Pp.15-31) 多賀出版
- 富田信穂 1986 新聞にあらわれた責任 石村善助・所 一彦・西村春夫(編) 責任と罰の意識構造 (Pp.191-207) 多賀出版
- 外山みどり 1977 Attribution に関する一実験 —— 結果の正負との関係について —— 日本グループ・ダイナミックス学会第25回大会発表論文集, 40-41.

- 外山みどり 1984 他者行動の帰属における推論の過程 —— 割引原理・割増原理の検討 —— 実験社会心理学研究, **24**, 23-35.
- Tyler, T. R., & Devinitz, V. 1981 Self-serving bias in the attribution of responsibility : Cognitive versus motivational explanations. *Journal of Experimental Social Psychology*, **17**, 408-416.
- Ugwuegbu, D. C., & Hendrick, C. 1974 Personal causality and attribution of responsibility. *Social Behavior and Personality*, **2**, 76-86.
- Vidmar, N., & Crinklaw, L. D. 1974 Attributing responsibility for an accident : A methodological and conceptual critique. *Canadian Journal of Behavioral Science*, **6**, 112-130.
- 我妻 栄 (編) 1968 交通事故判例百選：重要判例の集大成 別冊ジュリスト No. 18 有斐閣
- 若林 満・中村雅彦・斎藤和志 1987 先端技術に関する調査報告書(Ⅱ) —— チェルノブイリ原子力発電所の事故が原子力発電の評価とイメージに与えた影響について —— 経営行動科学研究会 (名古屋大学教育学部組織パーソナリティ研究グループ)
- Walster, E. 1966 Assignment of responsibility for an accident. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 73-79.
- Walster, E. 1967 'Second guessing' important events. *Human Relations*, **20**, 239-249.
- Wang, G. & McKillip, J. 1978 Ethnic identification and judgements of an accident. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **4**, 296-299.
- Whitehead, G. I., & Smith, S. H. 1976 The effect of expectancy on the assignment of responsibility for a misfortune. *Journal of Personality*, **44**, 69-83.
- 山下 昇 1984 安全態度に関する研究 (1) —— 責任帰属の要因について —— 千葉工業大学研究報告 (人文編), **21**, 81-88.
- 山下 昇 1986 安全行動の予測要因としての態度：「危険認知」および「運転の望ましさの評価」 交通心理学研究, **2**, 33-42.
- Younger, J. C., Earn, B. M., & Arrowood, A. J. 1978 Happy accidents : Defensive attribution or rational calculus? *Personality and Social Psychology Bulletin*, **4**, 52-55.